

596

特 252

680

博士 蜷 川 新 述

國家社會主義の不合理性

東京市外千駄ヶ谷町七七五番地

自衛社發行

電話 青山一〇三七二四番
振替東京八一三三七七番



始



343-530

特252
680



目

次

一、錯覺に立てる言説の流行……………三

二、國家社會主義の不合理……………七

三、資本主義の正しき確認……………一四

四、マルクス主義に對する大戦後歐米識者の正判……………一四



國家社會主義の不合理性

法學博士 蜷 川 新

一、錯覺に立てる言説の流行

最近日本には、國家社會主義禮讚の聲が四邊に聞へる、唯單に社會民主黨の黨人のみの聲にあらずして、意外にも〇〇の間にも此聲ありとの事である、此現象は果して慶ぶ可き事態であらうか。

或地方に發行せらるゝ或る雜誌紙上にも、公々然として國家社會主義の唱へられつゝあるを見た、國家皇室を尊崇するを名とし、國體擁護を標榜し、自稱愛國者の多く關係せられつゝある雜誌也との事である。此の紙上に唱へらるゝ國家社會主義は余が調査攷究の結果に依れば、結局は社會主義とは全然反對の思想であり、資本主義論者であることを、余

は確め得た、蓋し其の論者は、時流に捲き込まれて、資本主義行きつまりの俗説を輕信し或は二三の大なる富豪の壯大なる興業を怨嗟し、社會主義の說に基いて之を憎惡し、斯くして「大富豪は有害也」と判断し、之れが爲めに、國家を本位としつゝ社會政策を行ひ、以て不幸なる民人を救はんとするの意に過ぎないのである。則ち、其の社會主義とは、其人の意思には惡意なしとするも、事實は偽れる看板であり、其の賣る所は、社會政策に過ぎないのである。

今の日本に於ては、輕信を因とし、斯る曖昧の主張大に流行する、之れ確に青年を初め世人を迷はしむる禍根である。「滿洲には、搾取なき社會を作るべし」などとの俗論も、此の結果である、之れマルクス主義の表はれであるを如何んせん。

此の種の言説は、社會主義者の計畫通りに、無制限且公然に、マルクス主義の流行を日本全國に誘導するものであり、國を擧げてマルクスに走らしめ、社會革命を招來せしむるの結果となるものである。其故に、若しも社會革命を好む人であるならば、此種の主張は確に適當であり巧妙である、各人各々思想は異なるべし、又言論は自由であらう、併し乍ら、

國體尊重を標榜し、國家興隆を唱へ、日本歴史尊重を力説し乍ら、之れと正反對の社會主義を禮讚し、無制限に資本主義を排斥し、社會主義の上に、「國家」なる冠を戴せ以て社會主義をカムフラージし、之れを公々然として日本に唱道する事は、そは明に矛盾であり、或は欺世である、少くも自己を欺くものである。

余は、今の日本には、斯る曖昧の俗論の流行するを危險也と見る。全國民に向つて、一層眞劍の人物を顯揚し、以て混迷より現代を救ひ出さしむるに努めしめざる可らずと提言する。迷謬の流行は必ずや世を紊すべく、野心家の策動は人民をして禍を蒙らしむべし、全日本人は、正當の見解を持って、自ら衛るの必要がある。之れ余が國家社會主義を非也として世人に警告する所以である。

二、國家社會主義の不合理

一

「國家社會主義は結構だ」と云ふ人が今日の日本には澤山居る、案外の人々に此の賛成者

が居る、余には眞に意外の現象に見える、此等の人々は社會主義を何と見て居るのであらうか。社會主義を理解しないのであらうか之は無責任也。

二

インターナショナルは排斥するとして、國家の範圍内に於て、若も社會主義を其儘に行つたならば、其の國は如何なるであらうか、社會主義は、勿論資本主義の敵である、「資本家階級を仆せ」と異口同音に、彼等は怒號する、即ち階級闘争である、一國內にて、階級闘争に耽り人民が争ひに争つたならば、其國は衰へ行くは知れた話である、國が衰退混亂して、其れが國家としての幾千の價值があらう乎、殊更に貧弱國を作らんと欲するの徒は宜しく國家社會主義に走る可きである。

三

社會主義とは、私有財産を呪ふ主義である、之れ定論である、若しも私有財産を絶対に禁止したならば、御料局も内藏療も全廢しなければならぬ事になり、天皇の御料は一切廢止しなければならぬと云ふ結論は到達する之れ理論也、斯る事を、國家社會主義者は敢て

望むのである乎。恐るべし。

四

若しも私有財産禁止の代りとして、一人の人に、又は一家の主に、例へば、百萬圓の年額賄料を國より給付するとせば、其の交付金は勿論私有財産となる、國家社會主義は、其の主義上斯る私有財産制を禁物とせざる可らず、總ての人は、唯單に皆な生きるだけの物を國より與へらるゝのみ、國家社會主義者は、斯る事を日本に實行せんとするの乎。之れ國の歴史の破壊であり、社會革命である。恐るべし。

五

國家のみ財産を有し、總の私有財産を禁止し、人民は總て私有財産を有す可らずとせば其れは、國家資本主義であり、國家社會主義と名づけられるべき理由がない、資本を擁する社會主義とは、理論上意味を爲さない。何故に之を國家社會主義と云ひ得るなるか。

六

總ての人に財産私有を禁止せば、働かざるものが勝利者なり、世に進化は止まる、國家

社會主義者は、懶け者の勝利に盡さんとするのか、之れ文化の敵である。

七

若しも總ての人に向つて、生産財は之を禁止し、消費財のみを認めとせば、其の消費財を剩せる時は如何にするの乎。之を個人の私有とせば、其れは資本主義であり、社會主義ではなくなる、無理にでも財は總て消費させるの乎、之れ眞に愚の極なる方策である。世を紊し亡すもの也。

八

日本の憲法には「日本人は所有權を侵さるゝ事なし」と規定してある、(憲法第二十七條)發布の詔勅にも斯くある、即ち日本人から所有權を奪ふのは、違憲である、非立憲である、背勅である、國家社會主義者は、敢て斯る不法不正を行はんとするの乎。如何にして此の憲法を變更せんとするの乎。

九

今の世界は、例外なく皆な資本主義の國である、總ての人に所有權は認められつゝある

總ての人民の意識にて、此の主義は行はれつゝある、日本人のみ獨り此の世界の大勢に逆行せんとするの乎、斯して如何する積りなの乎。

十

其の所謂國家社會主義とは、理論上、社會政策の異名であるならば、明白に命名して、社會政策と稱すべし、國家社會主義者が、既に世界文明國より亡びたる主義の殘骸にのみ戀著するのであるならば、其理論の無視と、其のあきらめの悪きとを、嘲らざるを得ない。名は實の賓也。

三、資本主義の正しき確認

一

『資本主義』と初めより銘を打つて産れ來りし主義は、世界になし、一八〇〇年の初めに、社會主義と呼ぶもの歐洲に生じ來り、此時以來之れに正反對の主義を、『資本主義』と唱へたに過ぎない、従つて社會主義の本體が何者なるかを明にせば、資本主義の正體は必

然に現はれ来るのである。

社会主義と云ふのは、『個人に財産の私有を認めては相成らない』と云ふ主義であり、之れが其の本體である、之れに對する所謂資本主義は、『個人に財産の私有を認めざる可らず』と云ふ主義である。(安部磯雄著「社会主義の時代」第四六頁参照)

二つの主義は、斯く見るに於て、其の分界明瞭となる、此以外の説明には曖昧のもの多し。

二

個人に財産の私有を認めれば、世に自由競争は生じ、資本の集中も行はれる、而して、横暴資本家も出で來つて、分配を不公平になす事も自ら生じて來る、蓋し人間は神ではない事明也。然らば、世を社会主義となせば人間は神に化すかと云へば、斷じて斯る望みもない。個人に財産の私有を禁ずれば、人間は怠惰漢になるに決つて居る、蓋し人間は神ではないからである。

三

個人に財産の私有を禁ずれば、社会の合理發展は即ち止む、蓋し怠け者のみにては合理的發展のありよう筈がないからである、若しも人間は食ひさへすれば即ち可なりと云ふのであるならば、社会主義は結構である。

資本の私有を、若しも無制限に認めれば、資本は集中せられ、貧人の生活に悩むものも生ずる、専横なる資本家も出て來る、併し乍ら、其の自由競争は、社会を進歩せしめる、現に資本主義の盛んなる米國の益々進歩し、舊獨逸の駸々として進歩した事は、此の理の明々白々なるを證明する。

四

資本主義は全然不合理であつて、最早行きつまつたと論ずる人が日本にもある、其れは何れの國に於ても常に主義者の口癖であり、日本人としては歐人社会主義者の古き型の人眞似である、資本主義も絶對的に行きつまつた事実なし、反對に資本主義の社会は、明に日進月歩し、行きつまつた事実あるを見ない、今日失業が生じたからとて、それは一時の現象であり行きつまつた事ではない、失業は古くからある事實也、今日世界が不景氣だと云ふ

のは、資本主義の行きつまりではない、若し不景氣が資本主義の行きつまりならば、大戦後に生じたる世界的景氣は、之を何んと説明するなりや、百年以來、主義者の論難ありしに拘はらず大戦後に於て『資本主義の全勢時代生じたり』と云はざるを得なくなるではないか、それならば、大戦前に於て久しきに亙りて八釜ましく資本主義を排撃したりし歐米の社會主義者は、何の顔を以て、世人に見え得るのであるか、大戦前は、唯空論を唱へて居りたりとでも辯解する他なかるべし。

五

資本主義は人間の進歩上より見て悪でない、日本人としては、此主義を正しく擁護すべきである、若しも此の資本主義を非也と云ふならば、其人は、先づ皇室の御料にして必要なる私有財産を如何に取扱ふのか、此の重大問題に明答し見よ、「國家社會主義」の名は、羊頭狗肉であり、内容はマルクス主義である、日本には、絶対に容る可らざるものである、又日本の憲法からも認め得ない、第二十七條を見よ、日本人は所有權を侵さるゝ事なしと保障せられてある。

六

資本其者は尊重す可し、之を人民に認むべし、即ち資本主義にて可也、併し乍ら、資本を弄び、一般人民に迷惑をかけた、ある『重役』と稱する誇稱の尊大物の多くは自覺せしめねばならぬ。五分六分の配當又は利子を受けつゝある一般資本家なるものは、何等責む可き點なし、此等資本家に對し、「搾取家なり」と罵るのは失當也。慎むべきである。

日本の重役と云ふものは、一般に世人に對して惡きものである、搾取の甚しと云ふのは、此の種の人の事也。但し『資本』と『智能』と並せ有し、正當の分け前を取る重役は、國民の爲に尊む可き人である、『資本』と『智能』と並せ有する人は、『勞働』のみを供する人に比して、其の分け前の多きは、之確に正しい事である、勞働者のみを重んずるは資本のみを重んずると同じやうに、最早過去陳腐のマルクス論である、米のエジソンは、資本と能力と並せ有した人であり、此人が其の使用する勞働者よりも、其の分け前を多く取つたからとて、其れを搾取と云はるべき道理なし、勞働者の爲に恩人也。

七

人間に尊ばるべきは、資本よりも、勞力よりも、智能でなくてはならぬ、此智能ある人は、分前を多く取つて可也、自ら富む權利あるべし、智能なき人にして、智能者と平等なるを主張するは、自己のみを重んずる驕慢である、公正の見なしと云ふ可きである、總て驕慢は亡ぼすを要する、智能は絶対に重んずべし。進歩の源泉である。

資本に關しては、社會政策を適當に行うて以て、その弊を制して可也、人間に智能あり、此事を適當に解決す可きである。一八四八年以來のマルクスの古き説には最早權威なし、日本人は露人レニン以上の賢者たるを要する、レニンに隸屬する日本人は、日本人としての價値なき人である。

八

今日の日本には、資本主義を目して、世上に許す可らざる主義の如くに思ひ込みつゝある人あり餘りに多し、之れ俗論追隨であり、餘りに研究を離れたる迷謬と云ふ可きである。

青年又は壯年の會にして、資本主義を罵り、之を排斥するを以て、其の理想となすもの

もある、此等は、古き人マルクスの弟子たるを其矜りとする、大戦後日本には、マルクスの古き教を奉ずる弟子のみ餘りに朝野に充つ、而して多數の此の弟子は、全日本を驅つて、社會主義者と化せしめんと努力しつゝある、其中には、口には社會主義を排斥しつゝ、實は社會主義なる人も多くある、日本に思想の紊るゝは、此等の矛盾せる人の爲す所なるのである。社會の毒素たるを國民の爲めに悲しむ。

此等の人々が、日本歴史を學べと説き、國體を明にせよと唱へ斯くして思想を正すべしと其の口先にて叫んだ所で、其れは偽りの詞である、腹是口非也。或は迷謬者也。

國民は右すべきか、左すべきか、其の態度を明白にすべきである、何れなりとも、人は其正しと信ずる所に向つて進むが可也、世界の大事に鑑み、道理ある所に歸著し得る國民にして、初めて文明人たりと云ひ得る、斯うして世界列國の中に生き得べし。

四 マルクス主義に對する大戦後歐米識者の正判

一 序言

二 佛國學者のマルクス主義排斥

三 歐米の學者のマルクスに對する嘲笑

四 マルクスの主張の矛盾と不明

一 序言

歐米に於ては、大戦以來マルクス主義は痛く棄てられた、之れ余が休戦以來歐米の事實に基いて、邦人に警告し來りたる所である。

マルクス主義は、戦争前には、歐洲に於て大いに流行したものであつた。然れども、大戦以來、歐洲の識者は、大膽にマルクス主義を排撃し、之れを非科學的也と嘲罵し始めたのであり、之れより、一般人は、其の過去の迷謬より覺醒せざるを得ざるに至り、唯物主義は侮られ、インターナショナルは人類の生存に合致せざる空想と認められ、階級闘争は

社會の福祉を阻害するものと嘲けらるゝに至つたのである。

此の事に關し、歐洲の識者の所説を、左に抄録し、以て邦人の爲めに、大勢判斷の資に供する。

二 佛國識者のマルクス排斥

一九一七年、未だ大戦は終らざれども、英佛側には、勝利の自信を懐くもの生じたりし折に、佛國に於て、リシス (Lyons) と呼ぶ文名を以て、「新しきデモクラシーの方に、(ヴェール、ラ、ヌーヴェル、デモクラシー) と題する小冊子が出版せられたが、其の中に、舊來佛人の深く陥りたるマルクス主義は、時代に適せざる缺點多き謬説なる事を論破し、佛人は宜しく斯る謬見を一掃し、新しき民主の國民とならざる可らざる事を理論正しく説いてあつたが、小冊子は、非常なる感激を全佛國人民に與へ、之れが爲めに、國民の思想は一變したるが如き有效なる結果を齎らしたものであり、余も一九一八年、佛國に於て此書を愛讀したのであつたが、其の中に左の一節がある。(同原書第五六頁乃至第六一頁)

「マルクスはソウ云つた」と、此の一言にして、佛人は由來之れを決定的價値ある證言なりとし駁

撃の餘地なき議論也と認めて居たものであつた、若しも論争のありし場合に於て、マルクスの説を引證するものがあつたならば、其れにて萬事は解決し、沈黙するのが用意深き態度也とせられ、之れに反對するものは、異端者也邪教者也とせられたものであつた。

之れ眞に馬鹿らしき事であつた、何んとなれば、マルクスの説は五十年前の古き説であり、其時以來、世界は著々として進歩したからである、マルクス崇拜者の云ふが如くに、マルクスは縦令深い思索者であつたとしても、マルクスの述べたる實用なき幾多の議論の中にて、假りに二三の採る可きものを遺したりとせば、其れにて充分なりとなして好い筈ではないか、最も優秀なる天才の人々等は、凡そ此の程度の結果にて満足するものである。マルクスとても、さうでなくてはなるまい、マルクスは經濟學を建設するのみならず、我等の社會組織に付て、完全なる原理を建てんと企てたる非常なる野心家であつたと云はれて居る。

併し乍ら、物理とか化學とかの如き、正確なる科學でさへも、逐次に無數の學者が、研究を積み發明を爲し、諸學者合的の事業として成立したものである事を觀取したならば、社會科學と呼べるゝ極めて錯雜したる法則及關係の全部を、唯單に一人の頭腦より案出せんとする事の空想なるを知るであらう。

然り而して、マルクスは其の説を立てる爲めに、如何なる事を爲したであらうか、彼は其の廣汎なる研究の範圍内に入り來るべき無數の事實を考査する事を試みたであらうか、明かに然らず、彼の生命は、斯る研究を爲すには、充分ではなかつたのである、彼は單に單純なる理論を立てるの、法を取りたるのみであつた、彼は經濟の最も初歩的の事實に基いて、價値の意義を説いたのであつた、彼は最も單純なる方式より出發して、最も錯雜せる理論を附んとしつゝ、富の生産と分配とに關する一切の法則を嚴酷に推斷したのであつた。之れ生ま優しき狂氣と云ふべきもの也。』

之ればかりではない、マルクスは、經濟の方則に關し、其の代數學者的精神の嚴酷さを加味した、彼は天體を司配する法則と同様の嚴格さを以て、經濟法則を考へた天體の法則は數學の方式に依りて行はるゝものなるが故に、其の未來は之れを判斷し得となし、マルクスは、天文學者が、日蝕を豫言するが如くに、資本家世界の終末を宣言した、但し其の何時に於て來るか、は宣言し得なかつた。

然し乍ら、此等の嚴格なる法則以外に、社會には、人間があり、其人間は考へ且つ感ずるものである。社會に於て、然らば人間の精神は、如何なる任務を爲すものであるか、マルクスは之れに對して、頗る平氣の平左で宣言して云ふには

『それは單純なるものである、人間の思想と感情とは、緊密に經濟上の事實に附隨して居るものであり、人は蔭の如くに此の經濟上の事實を追ふものである、それであるから、人間の思想感情は堅實性なく、固有の價值と云ふものがない』
と、之れ事理顛倒と云ふものではないか。

マルクスの方式は總て、宿命的の思想より成立して居る。

『資本主義制度は其れ自體によりて發展し、事業の集中と云ふ事は、機械的に其所に生ずるものである。』

と云ふが如きが其れである。彼の言によれば、工場主は寄生物であり、彼は報酬を受くるの權利なし、工場指揮の給料を受くるの權利なしと云ふのである、工場に於て勞働するものは、唯だ職工のみであるが故に、工場主は、勞働者の給料と勞働者の作る生産物の價值との間の差額を盗むものであると云ふのである、眞に之れ全然架空の説である、彼の説は、天才や、才能や、發案力や、組織能力や、知識やには、何等の分け前をも與へないと云ふ主義である、努力や、活動や、意思力や、堅忍力やに對しては、何等の分け前をも與へないと云ふ主義である、一言にして云へば、生産の主要力たる智的、德的の性能に對しては、少しも分配を與へないと云ふ主義である。

總て此等の事柄に付ては、明白銳利なる方式を以て表明せられ、之れを文章や、口舌を以て世に擴められ、病毒の如くに社會に撒布せられ、勞働者の精神を組織的に毒害したものである。

併し乍らマルクス死して以後に、種々の事件が社會に發生した、我等は先づ第一に、工業上の大進展を見た、我等は順序を覆み法則を守つた、我等は資本主義の進展の上に、諸種の經驗を積み、マルクスの知らざりし資本主義上の種々の重要要素を承認した。

今日我等は、凡そ工業と云ふものは、宿命的に展開して行くものではなくして、國によりて各々異りたる進歩を爲すものであると云ふ事を立證されて居る、我等は米獨英に於ては工業は大發展を爲し。佛國及西班牙に於ては、其の不振なる事を現實に知つて居る、然らば、資本主義は、強力なる又は弛緩的なる方式にて發達するものであり、其れは、資本家が智能と精力とを多く働かすと少く働かすとに因りて、生ずる差異であることを證據立てるものである。

社會事情の變化するに従つて、社會主義者の思想も少しづつ變化し來つた、而し以前の小説のやうな主張から追々と脱出して來た、我等は彼等の賤劣低級なる輕信を嫌忌する、若しも彼等が唱へしが如くに、勞働者階級にして諸種の生産方法を奪ひ取つたならば、彼等は何事をも爲し得ないであらう、彼等勞働者には、一般的知識を缺き技術的の知識を缺き、生産機關を指導し構成するの知

識を缺いて居る、此等の知識は長き經驗に由つて得らるゝものであり、未だ知識の劣りつゝある彼等労働者の中より、専門的の優秀なる能力を有する人物を求むるもそれは得られない、彼等の現在の野心は、其の地位を一層上位に置かんとするのであつて、決して其業務を確實にせんとするものではない、彼等には未だ此所迄の用意なく、現在としては、一層適切なる現在の指導者の雙肩に此の重任は負はされつゝあるものゝ如くである。是を以て、労働者の要求すべきは、革命^{レヴォリュション}ではなくして、社會の改^{トランスフォーメーション}造^ンであり、物質的精神的情態の不斷の改良である、此等の事は現在の社會に、一層科學的の指導を與ふるに依つて、之れを成就し得るのである。

若しも佛國の労働者階級にして、今日は最早革命的にあらずとしたならば、四十年前、採用せられたる過激の方式に服従して居られるべき筈のものではないか、此の過激の方式たるや、之れ科學的に過誤なりと認められつゝある獨逸の思想の影響より生じたるものであつた。』

以上の如くに一九一七年に於て、佛國にはマルクス排斥の強き叫びが擧げられ、國民は之れに謳歌したのであつた、それであるから、一九一九年の初めに於て、如何にボルシェビストが佛人を煽動した所で、效果の無かりし事は、好く分つた話であつた、日本に於ては、之れとは正反對に、一九一八年から、マルクス主義が大流行となり、學者と自稱する

人に、此のマルクスの高弟が輩出し、官吏の若手古手も之れに雷同し、大小新聞の大小記者雑誌記者も世界の情勢を解せず大きな顔して其の味方となり、野心ある労働ブローカーは、此の機に乗じて、全國に互りて亂暴狼藉を極め、「マルクスは社會主義の科學的大成者也」との旗を全國の津々浦々に迄も押し立てしめ、全國の學生までが、社會主義を眞理の如くに信ずるやうになつたのである。之れ「七分の狂態」と云ふ可きである。

三 歐米の學者のマルクス主義に對する嘲笑

法學博士瀧本誠一氏は、余が多年畏敬する經濟學者であるが、氏が本年正月の「祖國」に公にした「マキキシズムの批判」と題する論文の中に左の如き節がある。(祖國第三卷第一號)

『歐米の有名なる學者は、大抵皆社會改良論者であると同時に、社會主義には殆んど總て反對の意見を有して居るのである、學者らしき學者にして社會主義者と認むべきものは余の多く知らざる所である。近世著名の學者で反對の意見を發表し居る經濟學者は、マーシャル(ケンブリッジ大學) コーイン(ゲッツェンゲン大學) ゾンバルト(伯林商科大學) ジード(巴里大學) パテン(米國) ビールゾン

(和蘭) ベーム、パウエルク (塊國) 等の代表的諸學者であつて、其他哲學者にてはフリント博士、歴史家レッキ博士、生物學者ハクスレー博士、等皆社會主義に反對する主立ちたる學者である。現にマーシャル氏の如きは余の畏友福田博士等が、最も尊重せらるゝ學者なるが、氏は其の原論(第二版六二頁)に於て、

「社會主義者は人間の完全性を主張するものである、彼等の意見は歴史的若は學問的の研究に基くものにあらず、當代の實際的經濟學者の輕蔑を招くに足る途方もなき誇張の言に依つて説述される意見であつて、自分自ら攻撃しつゝある學說すら審に研究して居らないのである、彼等が現在の社會に於ける經濟組織の性質と効果とを理解し居らざること、を明證するは容易のことなりとす、故に經濟學者は、從來彼等の意見を檢討するの必要を感じなかつたのである」云々

と論じ、又其五五二頁に於ては、「多くの獨逸社會主義者は、リカードの冷鐵賃銀法「アイアン・ロー」が、今日現在實行されつゝあるものゝ如く信じて居ること」を指摘して、隱然彼等が經濟學の智能に乏しきことを表白して居るのである。云々、

同博士は更らに論じて曰ふには、又同じく余の畏敬する河上肇博士が、世界第一流の學者として推服し居らるゝ和蘭の大家ピールソン氏は、其の「經濟原論」に於て最も痛切に

社會主義者を攻撃して曰く、

「社會主義を鼓吹する人々中には、一人として學問あるものはない。我々は社會主義者の著はしたる書物に付て、誰が其の主義を明確に證論したる者ある乎と吟味し見たるに、彼等は皆悉く正確なる經濟學上の知識を有せざる無學者である、尤も彼等の中には天晴學者であるかの如く自任し居る者なきにあらざるも、其人達の學問の深淺を叩いて見れば、直ぐ其の底に達するのである。ラツサーレは、誤魔化し論法を以て、驚くべき手品を働き、ヘンリー、ジョージは、誤謬雜駁の論據の上に立てり、社會主義研究と題する著書の作者にて餘り世上に知られざるカーカツプは、今や經濟學者が放棄したる舊き過剩生産説を得意に主張し、フリユルシアは、多く書物を読みたるに違なきも、彼の説は概ね甚しき誤謬を以て充さるゝに依り、我々は彼を眞正の學者として承認することは出来ないのである、此等の人々に付て正しき學說を聞かんとするは全く無益のことであつて。彼等は漠然たる思想を、熱心に鼓聽して、徒に人の感情に訴へんとするのである」云々、(英譯經濟原論第二卷第八四頁及八五頁)

博士は更らに曰く、又伯林のゾンバルトは、其の著書「社會主義と社會運動」と題する書中に、マルクス、エンゲルスの共產黨宣言書を評し、「此書は世界の文學界に於て有名の書き物として居れど

も、誤謬と未熟の思想を綴つたものである」と云ひ、又マルクスの社會主義を批評し、社會主義の運動は元來學問的とか科學的とか云ふべきものでない、社會主義の運動は、此の主義が眞理であるが爲めに、するにあらず、有力なる武器であると云ふに過ぎないのである、故に科學的社會主義などと云ふは、言葉其自身が矛盾である。社會主義は學問とは分離して、緣故を絶つのが今日の最大必要である」云々（英譯八九頁）

博士は更らに論じて曰く、「又米國のジョン、マーチンと云ふ人が、社會主義と云ふ事の意味が分らぬと云つて、全國の學者政治家などに宛て、質問書を發して回答を求めたる珍談あり、其回答の中には「社會主義は化物の如く正體の分らぬものである」と答へたものあり（ジョン、グレー博士）「社會主義は猫も杓子も餘り八釜しく唱へたが爲めに、遂に其の言葉の意味が、メチャクに廣くなつて、解釋は出来なくなつた」と云うたものもあり「デヴィス、ジュイ博士）又現在有名な經濟學者シモン、パテン氏は、「社會主義と云ふことは、種々異りたる目的を有する雜駁の思想より成立したる混合運動を意味する様に思はる」と答へたる由なるが、此時甚しきは、「社會主義の主眼は、自由戀愛である、家族の破壊である」と答へたものもありと云うて居る、又社會主義の論者として知られたるジョン、スパイゴと云ふ人は、其の最近の著書「ソーシヤル、デモクラシー」と題する書中に於て、「社會主

義と云ふ語の解釋は、人々書物々に依つて異つて居つて、其主義は、殆んど何人にも出来ないものである。」云々。

以上の如くに、歐米の學者は、社會主義を公々然として嘲笑しつゝある、夫れであるから、社會主義は、一般の歐米人よりして、既に廢物視せられ、余の由來述べ來れるが如く、物の道理の分つた人の間には最早信ずるものなきに至つたのである。然るに獨り日本人のみ此の大勢を知らざるは、甚しき時代遅れと云ふ可きである。日本文化の爲めに恥辱也と云ふべく、日本人は世の自稱學者や自稱新人に對して、其の不明又は欺瞞を反省せしむるに劣力すべきである。

四 マルクスの主張の矛盾と不明

マルクスの主張には不明なる點が多くある、之れ歐米識者の近來指摘する所である、マルクスの唱へたる「インターナショナル」に付ても、其の云ふ所は矛盾し、不明を暴露しつゝある、今更此事に關して佛の有名なりし政治家ジャン、ジョーレーの著書、「新軍隊」(ラルメー、ヌーヴェル)の一節を藉りて、指摘して見れば左の如くである。(ラルメー、ヌ

I ヴエル第四三六及四三七頁

『其故に、プロレタリアは、祖國の中に在るものであり、其の外に居るものではない、マルクス及エンゲルスが、一八四七年に聲言したる「共產黨宣言」は、有名なる文章であり全意義にて屢々繰り返し唱へられ活用せられたものであるが、其の中に「労働者には祖國なし」と云ふ文句があつた、然れども、之れは、一時の感情に走つた言説であり、全く僻論であり、不吉なる言であつた、之れはブルジョア愛國者が、共產主義を以て祖國を破壊するもの也として攻撃したるに對しての論戰に過ぎなかつた。其れであるから、マルクス自身も亦、急ぎ之れを訂正したのであり、此文章の意味を極限するに努めた。即ち彼れは左の如き附言を爲したのである。』

『勿論プロレタリアは、先づ第一に政權を獲得しなければならぬ、主權を有する國民階級として、建設せられなければならない自ら國民ナションとして、組織せられなければならない、此の意味に於て、プロレタリアは、一國籍に結び附けられるものである、然れども、ブルジョア階級としての國籍と云ふ意味ではない』

マルクスの言ふ事は、甚だしく不明瞭と云ふべきである。其所に學者的たる點を見ない、煽動家たりと云ふべきも、科學者ではない、若しもプロレタリアは、主權を握る迄

は、祖國を有す可らずと云ふのであるならば、然らば其迄は、プロレタリアと云ふ大衆は無國籍の人なりと云ふのか、之れ無責任の言と云ふべきである。人類を漂浪せしめる殘酷の説である。マルクスの云へる「インターナショナル」は斯くも空疎の言である。之れを信ずるものあるに至つては、眞に愚なりと云ふべきである彼等は迷信者である。

マルクスのインターナショナルは、斯くも價値なし。

マルクスの云へる「階級闘争」は、然らば如何のものであらうか。

階級闘争は、若しも、マルクスの云へるが如くに、人民の間に生ずべき必然的の現象であるならば、古來全世界の人類の上に、此の現象は必ず例外なく現はればならない、然るに少くも東洋には五千年の歴史ありて十億に近き人口あれども、斯る歴史はない、日本朝鮮には決して無かつた。マックスは東洋の歴史などは、一頁たりとも讀んだ事はなかつたのであらう、之れ既に科學の根據を缺くものである。

又瀧本博士も主張せらるゝが如くに、「企業の利益」と「賃銀」とか、互に反比例して増減するものであるならば、勞資の争は其の間に生ぜざるを得ないであらうけれども、此の

反比例説が既に陳腐の舊説として科學者により價值なきものと認められ、労働者に、勞銀を多く與ふるに由りて、企業の利益を増加すとの論が、正しいものと認めらるゝ今日に於ては、階級闘争を以て必然的現象也と云ふなどは、科學者の言としては、半文の價值だもなく、唯だ不平なる貧者の感情を煽つて、世の中に一仕事をしよう云ふ一野心家の放言たるを示すに過ぎない。

マルクスの階級闘争説は最早今日にては價值なし。

マルクスの「價值論」に付ても、英人アレキサンデル、ザオスの最近著はせる「資本主義の必要」(ゼ、ネセシチー、オブ、カピタリズム)中に、之れを嘲つて居ると云ふことを、一月號の「明るい家」第二十一頁に中嶋信虎氏の談として簡単に掲げてあるが、余も亦常に同じやうに考へるものであり、労働のみが「價值」の要素では斷じてない筈であり、(一)人の慾望ありて、(二)人が智能を働かせ、(三)資本を投じ、(四)労働を加へて、茲に初めて價值ある生産物が生ずるのである。労働者の勞力のみが獨り尊いのでない事は、事實に基き明白な道理である、人の欲望、人の能力が大切な要素であり、其れに資本と

が更らに要素となるのである。能力ある人に適當の分け前を與ふるを正しとする、資本と能力と並せ有する人に利益の分配比較的多きことも正しき道理である。

マルクスの云へる所は、識者の指摘する如く其の大本に於て、明白に誤つて居る。マルクスの説は誤謬を基本として、之れより論理を進めた説であつた。其故は、大本の誤を覺らざる淺慮の人より見れば、如何にも理論的に見えるのである、之れ日本の讀書生の間、此の誤見の信者の今に尙ほ多き所以であらう。

歐米人は、既にマルクスの誤謬を覺つた。之れ其の説の全歐米人より捨てられたる所以である。總て正しきものは棄てらるゝ道理なし。日本人は速に醒めざる可らず。

昭和七年三月二十五日印刷
昭和七年四月一日發行

國家社會主義の不合理性

定價金拾錢
郵稅貳錢

雜誌「自衛」發行所

編輯兼發行人 自衛社

右代表者 湯原惣助

印刷者 中野鏌太郎

印刷 東京市芝區愛宕町三丁目三十二番地
東洋印刷株式會社

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町七七五番地

自衛社

電話青山七二四番、八三六〇番
振替東京八一三七七番

發行所

不許複製

終

